

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372700932		
法人名	社会福祉法人 成仁会		
事業所名	グループ ホーム みどり		
所在地	熊本県 阿蘇郡 西原村 布田 845		
自己評価作成日	平成30年2月5日	評価結果市町村受理日	平成30年4月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成30年2月23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

広報誌「しあわせがいっぱい」は家族、地域に好評である。職員が入居者と楽しく生活する為の工夫と視点がある。喜びを共有することができる。職員は常に笑顔で入居者、家族とコミュニケーションがとれている。法人内の情報共有もスムーズにでき、相互交流が出来ている。職員は役職、資格にとらわれず業務が出来、問題意識を持ち意見を述べる事ができる。入居者は退去後の不安感が解消できるように支援体制がある。新規入居にあたっては本人と家族と信頼関係が早期に出来るよう対応している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

熊本地震により避難を余儀なくされたホームは、復旧工事が完了し29年4月に再スタートしており、入居者の入れ替わりも見られるが、入居者は和やかに仲睦まじく過ごされている。復興中の地域の中での生活は生易しいものではないが、入居者の潜在能力を生かしながらの日常生活や、花見やドライブ等季節毎に外出を支援し、近くにある企業の運動会には出番の機会もある等生き生きとした表情に、職員のケア姿勢や地震という難局にどう立ち向かわれたかが表出している。復興中にある地域へ出かけることが困難な状況もある中でも着実な一歩が踏み出されており、ホームの持つ知識や職員のアイデアを生かしながら、地域とともに歩んで頂きたい。2020年東京オリンピックの開催を心待ちにした皆さんの思いが達成されるよう応援したいホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム内のケアにとどまらず、地域への貢献、信頼されるホーム作りを目指し、ガラス張りの運営を目標に実践している。	熊本地震で避難を余儀なくされたホームは、29年4月より再スタート。基本的なケア姿勢は変わらんとし、開設時からの理念である人間としての尊厳と家庭的な雰囲気での入居者の個性を活かし安心して暮らしを支えることを継続している。日々の情報共有や毎月チェックし見直す等周知徹底している。	ホームとして年度計画の中で目標を立て、年度末に精査し、次年度に繋げたいとしている。入居者の入れ替わりもあり、新年度に向け、理念に立ち戻った話し合いの開催に期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	従来行事を通じて今迄通りの交流がある。昨年は敬老・秋祭りは台風の為中止になった。地域のイベントには参加し交流している。	母体である特別養護老人ホームに隣接。地域住民との日常的な交流は少ない。中学生の職場体験や小学生のワークキャンプの受け入れ、近くにある企業の運動会に招待され、パン食い競争等の出番も設けられている。民家も少ない状況に、入居者の自宅も地域として捉え、故郷訪問として支援している。	地震の復興の中、なかなか地域に向けることは難しい状況でも出かけようとする姿勢は大いに評価したい。更にはホーム独自の行事等企画され、老人会等に参加を依頼すること等検討いただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	家族会、毎月発行の新聞等で、情報を発信している。また、GHを実際に見学してもらい理解してもらえようPRをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地震の影響から6月より開催する事が出来た。新しく入居された方が5名おられご家族の面会時に意見を聞いたり、報告するようにしている。	昨年6月より再スタートさせており、行政や利用者、村の代表として議員の参加はあるが、老人会・民生委員・区長等にも参加をお願いしているが、参加は少ないようである。地域密着型特養と合同で開催し、利用者にも要望を聞き取りケアサービスに反映させている。参加委員に入居者の現状も見てもらうことで、認知症ケア啓発の一環とされることが望まれる。	2ヶ月毎に開催されており、ホームの課題等テーマを決めて開催することを検討いただきたい。また、家族会の中で運営推進会議の開催については説明はされており、家族の参加意欲につながるような開示方法を再考いただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	村内行事に参加し協力関係が築けるようにしている。	役場には“みどり便り”を配布し、啓発の一環としている。運営推進会議を村内行事のりサーチや行政の方向性を含めた情報を収集する機会としている。管理者は村の地域包括支援センターの運営委員等として行政に関わっている。法人として、災害時緊急避難所として新たに役場と協定を結んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	徘徊で落ち着かれない時は一時的に施錠を行うが時間的ロックで対応できている。	身体拘束は行わないことを前提として、法人全体での研修により注意喚起するとともに、職員のストレス対策としてのストレスチェックや親睦会等を行っている。職員には抑制する言葉“だめよ、待って”を使用しないよう指導する他、職員同士も注意喚起している。玄関の中ドアにはテンキーを付け、外からの開錠は容易にしているが、職員が一人になる時間帯等にはロックすることもある。家族の説明の下、立ちあがりの不安定入居者にはセンサーを付けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部職員体制により、お互い注意し合える職場風土作りに努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学習機会は少ない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の説明はもちろんの事、退居にあたっては、不安がないよう十分な説明と今後の対応について説明するようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時の近況報告などで職員全員に話しやすい様な雰囲気作りを行っている。また、ケアプラン説明の際にしっかり意見を聞くようにしている。	職員は家族の訪問時に笑顔で接する事で話やすさにつなげ、出された事案により随時の対応や、現場で対応できない部分は管理者に上申する体制としている。家族会のなかでホーム側から運営状況等の報告や、食事会時に家族の要望等を聞き取りしている。入居者には日々のケアの中で聞き取りしているが要望等の申し出は無く、職員側から聞き取りするケースが多いようである。	“しあわせがいっぱい”と称するホーム便りを継続して家族に発行されている。この中で、行事等の他、運営推進会議の情報や、行事計画等も発信されるよう検討いただきたい。家族はケアしていただいているという視点から、意見等も少ないと思われるが、家族の忌憚のない意見や提案をホーム運営に反映されるような取り組みとして“しあわせいっぱい”を有効に活用されるよう検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に意見を出しやすい環境である。意見や提案が上がりやすい様日頃よりコミュニケーションをとっている。	29年12月より会議方法を変更し、昼間の時間帯にカンファレンスを行い、職員の“したい”ことや備品等は主任を通じホーム長へ上申する体制としている。また、職員個々の相談には主任が対応している。全員での業務見直しや、法人として有給消化の推奨、互助会等も確立しており、働きやすい環境が整備されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体に人事評価があり本人と上司が評価する仕組みがある。残業を減らす有給取得に努めている。資格取得に対する補助仕組みがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の勉強会の他、法人全体で勉強会を実施。外部研修の機会がある時には、研修扱いとし、順次職員を出せるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県、阿蘇ブロック会を通して、連絡、勉強会等の交流を図っている。その中で、事業所間の相互学習や訪問の機会を作るようにしている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の意見や思いを聞きだせるよう努めている。又、初期ケアプランにも反映できるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでに行う面接の中で家族の意見も十分参考にしている。アセスメント作成には家族にも手伝って頂き必要なものは初期プランにも反映出来るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	管理者と企画作成担当者が一緒に面談を行い現状の確認とその時の一番必要な支援を提案出来るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中で、共に暮らし支えあう関係を心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の面会時と年2回のカンファレンスに参加して頂くことでコミュニケーションを密にし家族からの信頼をもとに支援していくようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	定期的にドライブで故郷を訪れたり、地域行事への参加を支援している。	老人会の運動会や村の健康スポーツフェスティバル参加や、故郷訪問、家族との帰省、在宅時の知人の訪問、正月の帰省等家族の協力も得ながら馴染みの関係を継続している。入居者同士昔話で花が咲く等入居者同士も知人であったり、地元職員の存在も馴染みの関係が築かれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の場の雰囲気作りには努めているが、全て職員が介入するのではなく入居者にできる力があれば、利用者同士の支えあいを見守ることもある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の特養に異動された場合ケアプランを含めた情報の提供を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の言動や暮らしぶりから本人の意向や希望を把握し、必要であればケアカンファレンス、ケアプランを活用し支援するようにしている。	担当職員を中心として入居者個々のレベルに応じた聞き取りや表情・言動等により推察している。また、職員のほうから入居者にどうしたいのか等投げかけている。ケアマネジャーは職員の情報を集約し、家族に相談しプランに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際は本人や家族、施設担当者から情報を得るようにし、アセスメント用紙を活用することでより深い情報を把握することができるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人の有する能力等の現状はアセスメントを使って把握するようにし、ケアカンファレンスや申し送りノートを活用し、職員間の相互理解に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	三ヶ月に一回のモニタリングの他、六ヶ月に一回のケアカンファレンスで職員間の意見を集約。半年に一度は家族、本人も交えカンファレンスチームとしての意見がケアプランに反映できるようにしている。	家族の面会時に要望等を把握し、3ヶ月毎のモニタリング、半年毎のケアカンファレンス（担当職員による援助目標の達成度や満足度等の評価）を行っている。職員個々がまずはモニタリング表に目を通し、意見や提案などを申し出るよう変更し、見直しが必要な場合は追記するとしている。現在は全員でのケアカンファレンスは行っていないが、年度末には、ケアカンファレンスを含めた話し合いを行う予定である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録や申し送りノート、ケアカンファレンスの活用により情報の共有に努めている。また、モニタリング、ミーティングを活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族の面会やサービス担当者会議などを通し、意見や要望を取り入れている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人内の人的、物的、環境面の資源については広く活用、協働できている。現状の地域、社会資源のみでなく、新しく、資源の掘り起こしをしていくことが課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望等、必要性があれば以前からのかかりつけ医の受診を支援している。又、協力医療機関との連絡を密にし、適時、適切な医療が受けられるよう支援している。	本人・家族の了承のもと全員が協力医療機関をかかりつけ医として定期往診となっている。専門医受診が必要時にはホームで対応している。受診結果や健康状態は状況等図随時家族に発信している。定期往診時は、現状や気になる点を伝え、食事を含め注意点や指導を受けている。職員はバイタルチェックや異常の早期発見に努め、母体施設の看護師と連携している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に行われる回診時には現状を伝え法人内の看護師と連携できるようにしている。特変時等は早急に報告し受診の有無の指示を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はサマリーを使用し、本人の認知面や行動状況について申し送りを徹底している。入院中も面会を多くし、本人の不安を減らすと共に、病院のスタッフと関係作りができるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院時、カンファレンスの際に家族に対し急変時の延命処置、看取りについても聞き取りをおこなっている。	入居時に看取りを含め急変時対応等を家族の希望を聞き取りし、一般の家庭浴であることから、またぎが可能であることが目安となることも伝えている。家族には状態変化時などその都度主治医を含めて話し合い、特養への移動も可能であることを説明している。医療や看護師の支援が必要となり、母体の特養で最終を迎えられた方や特養への住み替えを希望されている方もおられる。	看取りケアは行っていないとしているが、今後更に高齢化することも視野に、緊急時対応や職員のメンタル面にも配慮した重度化・終末期ケアの研修機会があれば参加されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変事のマニュアルを作成し、特養との連携で急変事に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を配置し、火災や災害時の避難経路などの確保と、防火点検、隣接特養と合同で年2回の防火訓練とスタッフが自主的に行う防火訓練を行っている。	年2回、母体施設と合同で昼・夜を想定した防火訓練及び自主訓練を実施し、避難口にはスロープを備えている。災害備蓄として業者と提携した食備蓄やカセットコンロ、自家発電を備え、近隣のガソリンスタンドと提携し、職員へ周知を図っている。火元や門扉、施錠などの安全確認は日誌の中でチェックしている。	運営推進会議の中で、村内の熊本地震復興状況など報告されている。今後はこの会議の中で避難訓練を実施することも有効かと思われる。また、グループホーム単独での避難訓練の実施にも期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護の為、排泄時、入浴時など一人ずつケアを行っている。又、声掛けも耳元で行っている。	「入居者のこれまでの人生を尊重し、穏やかに過ごしていただく」ことを理念に掲げ、一人ひとりに応じて対応している。呼称は苗字を基本としているが、下の名前が安心される方もあり、失礼のないよう心掛け使い分けている。排泄時の誘導も耳元や小声で行われている。写真掲載など個人情報の使用については、本人・家族の了解を得、職員の守秘義務も、法人全体やホーム内でも周知徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	定期的に利用者の得意な料理と一緒に作っている。行事企画で外出の機会がある時は本人の希望に沿う様にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者になにか希望がある時は、話を聞いて都度対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	御家族に協力頂き本人の好みの服を準備して頂き、着て頂いている方や職員で似合いそうな服を選び着て頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	得意だった料理や昔ながらの調理方を日常会話の中で聞き出し、回数は少ないが行事企画と一緒に準備や食事を行っている。	献立作成や食材の発注は法人栄養士や厨房で、調理やおやつ購入などをホームが担当している。入居者から出された食べたい物や得意だった料理は行事として企画し、準備や片付けなど和気あいあいと楽しむ様子が記録物から確認された。職員は同じものを一緒に摂っており、思いを共有することで、会話も弾んでいる。入居者は台拭きやお盆拭きなどの作業に積極的に手伝われる方や、敷地内に実った梅での梅干し作り、漬物用大根の皮むきなど、昔取った杵柄を発揮できる場面も用意されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の状態に合わせて水分不足気味なときは、チェックをし必要分摂取していただいている。又、本人の嗜好を大切に、お祝いや行事、普通の食事のメニューに聞き取りをし、取り入れている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケア、義歯洗浄を行い口腔清潔に努めている。可能な限り自力にて行っていたりしている。舌磨きも行っている。必要時、歯科と連携している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンに合わせ、本人にあった方法で支援している。極力、普通の下着を使ってもらおうようにしている。	日中は尿取りパットを併用しながら、布パンツで過ごせるようにしている。殆どの方が自立されており、トイレ内は小まめに確認し、いつでも気持ちよく使用できるようにしている。夜間帯は安眠や安全面に配慮し、リハビリパンツやおむつの方もおられる。排便が困難な方も多くなっているが、薬に頼らず、散歩や運動により自然排便に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	年齢と共に排便コントロールが難しくなっている。個々に応じ施設用の散歩や体操をしたりしている。3日間排便見られない時は座薬を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	グループホームでは、一人ひとりがいつでも入浴できるよう、体制を整えている。個々の気持ちを第1にくつろいだ気分で入浴して頂いている	毎日、入浴の準備を行い、午後から本人の希望を聞きながら支援している。毎日や1日おき、シャワー浴でいい等、口頭で伝えられる方もおられ、湯温や時間など可能な限り要望に応えながらゆっくり入ってもらえるようにしている。入浴は基本全員への支援を原則とし、入浴できない場合は清拭・更衣を行うことを会議で徹底している。毎日の入浴の為訪問当日も多くの洗濯ものを干したり取り込む職員や、手際よくたたまれる入居者の姿も確認できた。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠の際は清潔な寝具を使っただけで定期的な洗濯、交換したものを使用。日中ソファーなどを活用し、リラックスできる環境づくりを心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	カルテに記入してある「くすりの説明書」をスタッフは必ず読んで内服薬を把握。一日分ずつセットし、毎食時、眠前と確認し、確実に内服行っている。内服に変更あれば記録し、申し送る。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの意思を尊重、又、能力に合わせて、茶碗洗いや、洗濯物たたみなど、ケアプランと連動し行っていたらいい。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	季節感を味わえる行事、ドライブへの外出は実施している。又、地域のイベント事へも参加している。	気候の良い時期は敷地内の散歩や毎日法人厨房へ食材購入の受け取り物に出かけている。物産館や花見(コスモス・ひまわり畑他)、空港など身近にドライブを兼ねて外出できる環境があり、季節ごとに出かけている。また、母体施設でのボランティアとの訪問交流に参加したり、村のイベントに出かけている。外出の様子は広報紙で開示し、今年度は家族と一緒に念願の自宅への帰省を実現させている。	ホーム内の様子は広報紙で紹介されている。今後は外出などを含め家族へも前もって報告を行い、家族の参加・協力を繋げていただきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	個人の金銭所持が理想だが現状は難しく実践できていない。買い物等の際に支払いを一緒にすることなどで実感してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望がある場合は、家族へ連絡を入れ、本人が家族と直接話を出来るよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常に環境整備に努め、清潔感のあるリビングになるよう工夫している。季節の花や道具を使い、季節感が出るようにしている。	震災からの改修が済み、以前のような環境となり、入居者も変わらない日常生活を過ごせる空間である。状況に応じた室温管理や床は特に掃除を徹底し、転倒がないようにしている。リビング内のテーブルの配置は、入居者の状況や相性などを考慮して見直している。庭先を眺められる場所にはソファを置き、入居者は日向ぼっこをしながら、地元の話やホームでの生活など笑い声に包まれている。リビングホールには外出をはじめ、日常の光景を紹介した写真や、2020年の東京オリンピックを心待ちに目標にした張り紙を掲示している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間には、間隔をあけてソファを設置し、気の合う仲間と思い思いの場所でくつろがれている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談の上で、本人の使い慣れた物を活かし、馴染みのある居心地の良い環境を心がけている。	居室には、もともと自宅で使っていた物や日頃から手にしていた物などを持ち込んで欲しいと家族に伝えている。テレビやカセットラジオをはじめ、着慣れた衣類や帽子などの持ち込みをはじめ、家族の写真などが掲示された部屋もあるが、ゆとりの広さのため、ものさみしい部屋も見られた。	物品がない方が逆に落ち着かれる場合もあるが、自分の部屋として寛げる空間となるよう、今後も家族の協力や職員のアイデアを活かした居室環境に努めていかれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能に合わせた福祉用具を活用し、危険防止に努め、自分の力を生かし動けるように支援している		